

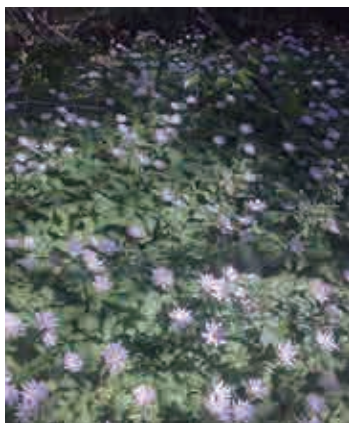
市長の伊賀じまん

—伊賀に咲く早春の花—



「春は名のみ風の寒さや」で始まる『早春賦』という歌があります。寒い冬のあとに来る春を待ち遠しく思う気持ちを歌った日本の唱歌です。

伊賀の早春の野山には、山野草などが一斉に花開きます。白い小さな花をつける“節分草”はご存じでしょうか。キンポウゲ科の多年草で、春の訪れを知らせる花です。



キクザキイチゲ（写真左）は菊のような花びらで紫がかった青色のかわいらしい花です。ふと通りがかったやぶ陰で、群生しているキクザキイチゲを見つけたことがあります。青から紫へのグラデーションが美しくかれんな

▶伊賀の山里に春を告げる“節分草”。左下のキクザキイチゲとも、伊賀市内で散策中に撮影。



姿は大変印象的なものでした。

ヤマシャクヤクもまた、春を告げる山野の花です。直径4cmから5cm程度の白い花をつけ、山中の景色を彩ります。

春に咲く花として忘れてはならないものにヤブツバキがあります。開花期間が長く、1月下旬から5月初旬まで花開きます。ツバキにはたくさんの種類があり、形はさまざまです。色も真っ赤なものや、斑入りの花びらをもつもの、ピンクがかったもの、さらには白いツバキもあります。市内を歩いているときに、竹やぶの中に真っ白なツバキが咲いているのを見つけ、その凛とした姿にハッとしたことを覚えています。

一年を通してさまざまな花が咲き、野山は千変万化して私たち見る者をなごませます。貴重で美しいこの花々の美しさを、いつまでも楽しめるよう大切に守り続けたいものです。

（伊賀市長 岡本 栄）

戦争と慰霊

市史編さんだより (36)

今年、戦後70年の節目の年です。国民の大半が戦争を知らない世代となり、戦争の記憶の風化が危ぶまれる時代となりました。

先の戦争では、市域から多くの方々が出征され、たくさんの方がアジアや太平洋の島々で亡くなられました。戦没者については、『青山町史』や『伊賀町史』などの自治体史や遺族会発行の書物にご芳名、戦没地・年月などが記されています。

それらをまとめると、市域の戦没者は約3,000人にも上ります。その戦没地を見ると、フィリピン、インド、ビルマ（現ミャンマー）、中国が多く全体の6割を占めています。また、その年月を見ると、敗色が濃くなった昭和19年（1944）半以降急激に増え、市域では毎月100人、ときには300人を超える人々が戦死された月もありました。

フィリピンは、徴兵により市域の人々が多く入隊した陸軍の第33連隊（津市久居）が、防衛のため動員された場所であったためです。インド・ビルマに出征したのはインパール作戦に従軍した人々でした。インパール作戦では、戦死した日本兵の遺体が街道に延々と続き、その道は「白骨街道」と呼ばれたほどでした。

戦没者数は地域の中でどの程度の



▲柘植歴史民俗資料館裏の「平和の礎」

割合であったか、当時の戸数から見ると、地区によって多少の違いはありますが、およそ20〜25%、実に4、5軒に1軒の割合で戦没者を出したことになり、地域に深い悲しみと苦しみをもたらしました。

戦没者を慰霊するため、市内の各所に慰霊碑が建立されました。こうした慰霊碑は、日清日露戦争後に建立された「忠魂碑」もありますが、昭和20年以降も多く建てられ、現在も慰霊祭が執り行われています。慰霊碑には、戦争による犠牲者の慰霊と平和への祈りが込められています。

総務課市史編さん係

☎ 52・4380 FAX 52・4381